

1. 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領の趣旨から

総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする。このことは、思考力・判断力・表現力が求められる「知識基盤社会」の時代の要求に応えるものである。また、「小学校学習指導要領 総合的な学習の時間」の改善の具体的事項の(ク)には、「互いに教え合い学び合う活動や地域の人との意見交換など、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視するとともに、(中略) 探究的な活動を重視する」とある。

そこで、学習素材とする故郷大蔵の「ひと・もの・こと」と関わって、協同的・探究的な学習を繰り返すことは、主体的な学習意欲を高め、学んだことよさや価値を高めることができると考える。さらに、身近な人や社会・自然との関わりを充実させることが、児童の自立の基礎を養い自己の生き方への気付きにつながると考えた。

(2) 本校の学校教育目標から

本校の教育目標は、「心身ともに健康で体・徳・知の調和のとれた自主的で実行力のある児童の育成」である。学習においては、児童が自らの力で、または他者と協力しながら、全力で問題解決に向けて取り組む姿を目指している。このような姿を具現化するためには、児童が心を揺さぶられ、「～せずにはいられない」と思わせるような「価値ある体験活動」を仕組むことが大切であると考えた。

本校校区には、大蔵川を中心とした豊かな自然環境と、古くからこの地に住む人々によって脈々と受け継がれてきた歴史と文化がある。総合的な学習の時間の学習は、このような地域の自然・歴史・文化等を教材化することで、「価値ある体験活動」を展開することができる。

そこで、地域を学びのフィールドとし、児童の思いや願いに沿った単元構成や体験を通じた学習活動を充実させることを通して、児童の「確かな学び」を育てていきたいと考えた。

(3) 本校児童の実態から

昨年までの研究の取組から、以下のような児童の姿が明らかになっている。

- ・ 校外での体験活動や主体的な問題解決学習を重視し、児童の興味・関心・意欲を大切に学習展開を図ったことで、児童は生活科や総合的な学習の時間の学習を「楽しい」と感じている。
- ・ 地域の自然や人と関わる体験を通して、大半の児童が大蔵のまちを好きと感じている。さらに、進んで地域に関わっていかうとする意欲や地域のひと・もの・ことに対する肯定的な見方や考え方が育ってきている。
- ・ 地域の方々の大蔵のまちに対する愛着の思いや共生の願いに触れ、共感したり尊敬やあこがれの気持ちをもったりする児童も見られた。また、大蔵のひと・もの・ことと自分の生活が密接に関わっていることに気付いたり、地域の一員として自分ができることを考えたりする児童の姿を見ることができた。
- ・ 身近な事象に対して「なぜ」「おかしいな」といった疑問を抱き、その疑問を積極的に解決しようとする姿勢はまだ十分に見られない。
- ・ 興味・関心の個人差が大きく、自分の思いがもてなかつたり、言葉や絵で表現したりするのが苦手な児童が見られる。

特に、本校の児童は、総合的な学習の時間に対する関心や学習意欲が高く、これまでの学習経験から問題解決するための方法も身に付けてきている。しかし、学習したことを言語によって分析したりまとめたり表現したり意見を伝えたりすることに自信がもてない児童もいる。

そこで、身近な地域のひと・もの・ことを学習素材として何度も繰り返し関わり、課題追究の場を多く仕

組むことによって、自ら問題解決する能力をさらに高めることができると考える。また、問題解決的な学習の中で伝え合い交流する活動を充実させることは、自分の考えをしっかりと話し合いに臨み、考えや意見を様々な方法で表出していく（伝えていく）ことにつながり、児童の思考力や言葉の力を向上させることになると思う。

（４） 地域の課題から

本校の校区は、人口が約7000人、世帯数3900世帯（1世帯平均2.0人）が暮らしている。校区の人口は年々減少し、人口構成は65才以上の高齢者約3000人（高齢化率38.5%）、14才以下の子ども数約700人（構成比8.8%）であり、婦人会、子ども会、老人会がなくなったり、地域の絆の希薄化が進んだりしていることが課題となっている。

校区の中央に大蔵川が流れ、東西は丘陵地となっている。川を中心に森など自然が豊かであるが、地形的には80%が急傾斜地であり、急坂や狭い道等で前述の高齢化と重なって、高齢者の引き込みが増加している課題がある。さらに、交通の便が悪く、タクシーも通れないため買い物が困難であったり、長い坂や石の階段が多く消防車が近くまで来られないところがあったりすることも課題となっている。

これらの課題の解決のため、地域では「地域のことは、地域で考え、解決する」をコンセプトとして様々な取組を行っている。特に、小学校は、地域の様々な関係機関・組織の中心に位置付けられ、地域の一員を担っている。地域では、「幼老が社会（地域）の真ん中で暮らす」ことを目指し、生活科や総合的な学習の時間の学習での連携を深めたり、大蔵ウェルクラブの実施等次の世代の地域の福祉活動者として児童を育成していく取組を進めたりしている。

地域の課題の解決と願いの実現に向け、体験活動を通して探究的・協同的な学習を進めることは、地域の一員としての自覚を深め、主体的に課題を解決していこうとする力を高めていくことにつながり地域のニーズに応えることになると思う。

2. 主題の意味

（１）「地域との関わりを通して」とは

地域の自然や事象、人物を中核に据えた教材を開発し、児童にとって価値ある学びを展開すること。

児童の生活経験の場である「地域」は、様々な自然や事象があり、人々の営みがある。そこには、教科・領域の本質に迫る多くの素材が存在する。それらを効果的に教材化し、地域を学びの場とすれば、児童の具体的な学習活動や体験が展開できる。そこでは、児童自らが地域に働きかけ、思考力や判断力、表現力を駆使しながら、問題解決を図っていく。そして、その過程の中で、自己への気付きや生活に生かす力を深めていくことができると考える。

（２）「確かな学び」とは

自ら進んで地域に働きかけ、問題解決の過程で、思考力や判断力、表現力を駆使しながら、自己への気付きや生活に生かす力を深めること。

児童の『生きる力』を育むためには、基礎的・基本的な知識、技能の確実な習得に加え、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力などの育成」が必要である。児童の「確かな学び」は、身に付けた知識や技能を活用し、応用することによって高められ、言葉や行動によって表出されなければならない。そのためには、問題解決の過程で、思考力や判断力、表現力を駆使しながら探究的な活動を充実させることが重要であり、そのことが確かな学びの結果としての「自己への気付きや生活に生かす力」を深めることにつながると考える。

3. 2期目第3年次(平成25年度)の研究

(1) 研究の目標

地域のひと・もの・ことに深くかかわる探究的・協同的な学習を通して学んだ大蔵の魅力やよさに対する多様な見方や考え方を発信し、伝え合うことを通して、子どもたちの地域に対する愛情と誇りを一層深めさせる。

(2) 研究の仮説

地域のひと・もの・こと・自然に深くかかわらせ、大蔵のまちの魅力やよさに対する多様な見方や考え方を主体的に伝え合い発信させながら、以下の3つの手立てを工夫すれば、子どもたちの地域に対する愛情と誇りを一層深めていくであろう。

- 〔手立て1〕 他教科等との関連や生活科と総合的な学習の時間のつながりを重視した系統性のある大蔵小スタンダードカリキュラムを編成し実践する。
- 〔手立て2〕 各教科・領域での言語活動を生かし、手段・場・方法を工夫しながら伝え合い発信する場を単元の中に効果的に位置付ける。
- 〔手立て3〕 学年で付けたい力を明確にした評価規準を設ける。

(3) 仮説実証のための具体的な手立て

- ① 学習に深まりと広がりを生み出すために、他教科等との関連や生活科と総合的な学習の時間のつながりを明確にして、単元構成を見直すとともに、各教科等の知識や技能等を主体的に繰り返し活用できる展開を工夫する。
 - 地域の魅力に迫る様々な学習素材や地域の課題に応じた学習素材の教材化
 - 他教科等との関連や生活科と総合的な学習の時間のつながりの明確化
 - 地域や関連機関と連携した体験的な活動の焦点化
 - 各教科の学習過程との関連付け（内容及び方法）
- ② 一人一人の気付きの質や表現力を高めるために、各教科・領域での言語活動を生かし、手段・場・方法を工夫しながら情報を発信させることを通して、コミュニケーション能力を高める。
 - 探究の過程の重視
(生活科→①出会う ②ふれあう・さぐる ③伝え合う, 総合→①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現)
 - 他者と共同して取り組む多様な学習活動の設定
 - 様々な形での保護者・地域への働きかけ
(生活科→伝え合う, 総合→まとめ・表現)
- ③ 自己の高まりや成長を実感し、学び続けようとする子どもを育てるために、学年で付けたい力を明確にした評価規準を設けて適切な支援を行い、指導と評価の一体化をさらに図っていく。
 - 各学年の目指す子ども像や身に付けさせたい資質・能力を明確にした評価規準の設定
 - 学習のまとまりごとの自己評価・他者評価の場の設定
 - 伝え合いや情報の発信を受けての保護者や地域などによる外部評価の場の設定
 - 学びの足跡としてのポートフォリオの充実
 - 設定した評価規準を基にした実践の振り返り

4. 研究の実際

(1) 本年度の研修計画

本年度は、研究主題を「地域との関わりを通して、確かな学びを育てる授業づくり」、サブテーマを「地域への愛情や誇りに思う心を伝え合い発信する生活科・総合的な学習の時間の取組」として、第3年次の研究を進めてきた。今年度の研究においては、第2年次の課題を受け、「発信」をキーワードに今まで培ってきた地域への愛情や誇りをより一層深めることをねらいとしたものである。また、「学校大好きオンリーワン事業」2期目3年次授業公開（11月29日開催）において生活科、総合的な学習の時間それぞれの授業を全学年・学級が提案し、本校の研究実践を発信するとともに、全市的な研修の場とした。そして、研究を組織的・計画的に推進することを通して、教職員一人一人の授業力の向上を図った。授業研究の前後には、必ず事前研修（指導案検討会）と事後研修（協議会）を行うこととした。さらに、年度末には、児童の学びの姿を基に研究の成果と課題を明確にし、次年度の研究へとつないでいく。